



No.2 2020年9月11日発行

寿都町の皆さん、北海道の皆さん、全国の皆さん、私たちは「子どもたちに核のゴミのない寿都を! 町民の会」です。

8月13日、片岡春雄寿都町長が「高レベル放射性廃棄物最終処分場選定の文献調査への応募」を検討していると北海道新聞朝刊にて報じられました。地元の寿都町民は何も知らされておらず、寝耳に水の状態でした。

私たちは声を大にして叫びます。私たちの町に核のゴミはいりません。美しい海と山と川にそんなものは似合いません。

寿都では、春になると、山では山菜が萌え、海にはホッケやコウナゴがやってきます。コウナゴの生炊きしらすをつくる醤油と水飴の匂いが町中を漂います。連休頃からは、寿都湾で養殖する牡蠣が水揚げされます。朱太(しゅぶと)川の栄養で育てられた日本のどこにも負けない美味しい牡蠣です。毎年7月の神社例大祭では、町のなかをお神輿や奴、花山が練り歩きます。秋になると、サケの水揚げが始まります。キノコを求めて、山を歩く人も増えます。冬には、ホッケがふたたび現れます。この時期のホッケは飯寿司の材料となります。自然の恵みによって、寿都は生かされてきましたし、これからも生かされていくことでしょう。

人間がそばに立てば、わずか数十秒で死んでしまうような強烈な放射能をもつ核のゴミ、無毒化されるまでに10万年もかかるような核のゴミ...。それほどまでに危険なものを、私たちの町に持ち込ませるわけにはいきません。子どもたち、その子どもたち、さらにその子どもたちが寿都で平和に生きていくためにも、声をあげるべきだと、私たちは立ち上がりました。

片岡町長にお願いします。私たちの美しい町を売り渡すような真似はやめてください。文献調査への応募はやめてください。

町民の皆さん、北海道の皆さん、全国の皆さん、私たちにお力をお貸してください。私たちは、寿都を守るために立ち向かっていきます。

2020年9月10日「子どもたちに核のゴミのない寿都を! 町民の会」

1.財政難? どうして核のゴミ?

片岡春雄町長は、応募を考えている理由のひとつとして、財政難をあげています。そもそも、寿都町の人口規模(約 2900 人)で、一般会計 50 億規模の事業を立てていることのおかしさが議論されていません。お隣の黒松内町は、似たような人口規模で、一般会計 40 億円規模となっています。財政難は認めるとしても、その原因、ほかの解決方法を示すことなく、核のゴミ最終処分場の文献調査の応募のみを言い立てるのは、自治体の首長としての資格に欠けていると言わざるを得ません。

2.拒否できるの?

「特定放射性廃棄物の最終処分に関する法律」4条5項には次のようにあります。「経済産業大臣は、第二項第三号に掲げる概要調査地区等の所在地を定めようとするときは、当該概要調査地区等の所在地を管轄する都道府県知事及び市町村長の意見を聴き、これを十分に尊重してしなければならない」。拒否できるとは、法律には書いていません。

一方、片岡町長は、梶山経済産業大臣から「知事又は市町村長の意見に反して、概要調査地区等の選定を行うことはありません」と記された文書を受け取ったことをもって、概要調査や精密調査を拒否できると考えているようですが、ときの大臣が出しただけの文書は法律に勝るものではありません。また、この文書には、知事や市町村長の意見としか書かれていません。町民の意見は無視するということでしょう。

3.公約だったの?

片岡春雄町長は 2017 年 10 月に無投票で当選しましたが、こんな応募は公約には入っていませんでした。また、2020 年 3 月に策定された第 8 次寿都町総合振興計画にも、こんな応募のことは触れられていません。私たちの会のメンバーも、この計画のために会議に参加したり議論をしたりしてきましたが、あの時間は何だったのでしょうか。

4.署名するな?

私たちは「寿都に核のゴミはいらない町民の会」として、応募に反対する署名を集めてきました。9 月 4 日時点で、町内で 735 人の方が署名してくださいました。およそ 4 人に 1 人が署名してくださいましたことになりませんが、署名を集めていて、「私は反対なんだけど、勤務先で署名すると言われてたから、ごめんね」と言われることが何度もあります。町民として意思を表示することに対して圧力がかかっています。これは人権侵害です。

5.核のゴミ問題について

片岡町長は核のゴミ問題に一石を投じたかったと発言していますが、そのこと自体は認めるにしても、広く国民的な議論が必要です。10 万年先にまで続く問題を、ひとつの町の町民が、たった一ヶ月で考えるというのは横暴です。

「子どもたちに核のゴミのない寿都を!」No.1 の記事の訂正と、追加説明

寿都にもちこまれるガラス固化体は 6 万本:現時点では4万本以上とされていますので、訂正します。「全国の原発にたまっている核のゴミが寿都に来ます」という表現の意味:まず、青森県でガラス固化体にされた使用済み核燃料が持ち込まれ、以後は、使用済み核燃料が再処理されてガラス固化体にされたものから順に寿都にもちこまれます。しかし再処理工場が機能していないので、将来、再処理されないままの使用済み核燃料が直接、寿都にもちこまれる可能性も否定できない、という意味です。

1.風評被害

8月13日の報道以降、寿都の名は全国区となっています。しかし、核のイメージとセットになったの知名度上昇には、なんらメリットがありません。水産加工会社には、「もう商品を買えなくなる」といった嘆きの声が多数届いています。一方で、「財政難を解決するために、ふるさと納税します」「応募しなくて済むように応援します」といった声も来ています。しかし、いざ、応募するとなれば、イメージ悪化は確実に進むでしょう。片岡町長は、反対運動こそ風評被害などと発言していますが、片岡町長のこの度の発案こそが最大の風評被害です。

2.町の分断

いま、町内のあちこちでは、賛成と反対の議論が交わされています。これまで、寿都町では、思想がちがっても、立場がちがっても、狭い町に住む町民同士、仲良くやってきました。しかし、片岡町長の発案によって、「核のゴミ処分場はいらない。そのためには文献調査も受け入れられない」「文献調査だけでカネをもらえばいい」「町長の言うことを信じる」などと、さまざまな意見が出て、ときには言い争いになることも出てきました。私たちは文献調査にも反対の立場ですが、賛成する人たちとの争いは好んでいません。しかし、反対の声は上げねばなりませんし、そうなると、分断がはっきり現れてくるのではないかと恐れています。片岡町長が応募をあきらめさえすれば、元通りの仲の良い町に戻れるはずです。今なら大丈夫です。

3.周辺町村・北海道との関係

現在、寿都町は、周辺町村や周辺漁協、周辺観光協会などから総スカンの状態です。自然を売りにする周辺町村にとって、とんでもないイメージダウンとなっています。鈴木直道北海道知事が寿都町にやってきて、片岡町長と公開面談しましたが、議論は平行線に終わりました。このまま応募ということになれば、寿都町役場や町内の経済団体が、周辺町村や北海道庁、関連団体と仕事をするうえで、非常に困難な道を歩むことになるのではないのでしょうか。寿都町の間人だと言うと、ほかの町の人たちから相手にされなくなるかも、という危惧を抱いています。

4.住民の意見をどう反映するのか

9月7日から住民説明会が始まりました。しかし、寿都本町以外では非公開となっています。しかも、今後のスケジュールも示されていません。町民の意見をどのように集約し、応募するかしないか、どうやって決めるのでしょうか。9月4日付の毎日新聞によると、片岡町長は住民投票はしないと断言しています。10月中に応募するかどうか判断するとも言っていますが、10月に議会が開かれる予定はありません。片岡町長が独断で応募を決めるというのでしょうか。



【私たちも反対します】

本庄敬(寿都町出身、漫画家、寿都町マスコットキャラクター風太くん作者)

「小さな小さな港町にふってわいた話です。故郷・寿都和近隣の町村、全ての愛すべき人たちが平穏無事暮らしを続けられますように...」



吉野寿彦(寿都町在住、マルトシ吉野商店社長)

「核のゴミを埋めるより、寿都の宝を掘れ!」

三木信香(寿都町在住、美容院経営)

「子どもたちが学校で核のゴミの話をしているそうです。言い争いやイジメまで起きていると聞き、悲しくなりません。これまで仲良く過ごしていた寿都の子どもたちがどうして仲違いをしなくてはならないのでしょうか」

樋谷和幸(寿都町在住、ペンション経営)

「かつての磯谷の海岸は真っ黒な砂鉄で覆われ、アマモが繁茂し、ハタハタ漁が行われていました。しかし、私たちの親世代の反対を押し切り、砂鉄採掘が進められた結果、アマモもハタハタも消えてしまいました。一時の産業振興を優先したために失われたものは取り返せません。町長は良いことだけを前面に出していますが、そこには必ず不利益がついてきます」

米坂純一(寿都町出身、札幌市在住)

「我がふるさと、山あり川あり海あり。のどかな町に波風を起こし、汚すことは許されません。私は札幌での仕事を辞めて、寿都に帰り、町長に立候補(?)する覚悟で反対していきます」

佐藤喜悦(寿都町出身、元寿都鉄道機関区長、札幌市在住)

「美しい町が核のゴミの最終処分場になることは承服できません。私の故郷が汚されようとしています。もう 100 歳になり、いつ死んでもいい命ですが、寿都がいつまでも美しく住みよい町であることを望んでいます。今年は鉄道 100 周年、いまでも私の頭のなかでは機関車が走っています」

山本竜也(『寿都五十話』『寿都歴史写真集』著者、寿都町歴史文化基本構想策定委員)

「転勤族の私は、たった 2 年半住んだだけで、寿都の魅力に取り憑かれました。海や山の美しさ、歴史の奥深さ、魚介類やその加工品の美味しさ...。日本中のどこにも負けない町です。核のゴミは絶対いりません」

駒木定正(駒木定正建築史研究所代表、寿都町歴史文化基本構想策定委員)

「唐突な寿都町の「核」にまつわるニュースは、まちの遺産(カクジュウ佐藤家)を地道に調べて、着実に国の文化財指定まで推し進めた快活なみなさんの姿とあまりにかけ離れ、次元が違いすぎる問題だ。堅実な暮らしとまったくスケールの違う「核」は、釣り合わない。「核」の導入による高額な交付金が魅力といえども、今一度原点に立ち返り、将来にわたって自然と暮らし、歴史と文化を大事にした心豊かな寿都であって欲しい」

「子どもたちに核のゴミのない寿都を! 町民の会」

事務局 048-0401 寿都郡寿都町字新栄町 101-6 TEL/FAX : 0136-62-3630

kakugomino@gmail.com